



阿部大三郎先生

明治 43 年 11 月 5 日生・昭和 49 年 2 月 3 日死去。

青山学院卒・英語教師。昭和 12 年 4 月浦中赴任、

兄の阿部鵬二先生公認の形で赴任された。昭和 14 年、3 年の組担当となったのを機会に 3 年生中心の蹴球部再建を計画された（昭和 14 年当初部員 5 年 2・3 年 1・2 年 1 の計 4 名）

どっと歓声が上がった、4 年甲組阿部先生の英作文の時間だった。授業の途中で「今日は日頃応援を受け、今回は神宮大会に出場した蹴球部の活躍の模様をお話する」と授業を打ち切った。

「神宮大会出場全チームが芝増上寺に大会期間中錬成合宿を行った。見渡したところ強豪揃い、大きな大会に初出場の我がチームは、どこと対戦しても勝味が薄く思われた。どうせやるなら強い相手と思っていたところ、抽センの結果は何と今夏の優勝校広島一中だった。そこで、私は対戦を前にチームのポジションチェンジを考えた。

広島のエース藤井を抑える為、昨年まで CH をしていた西原を R I から R H にさげ彼のあとへ田中を入れると。試合開始、広島 F W の強攻が続いたが、西原、半田の奮戦で藤井の動きを完璧に封じ得点をゆるさなかった。然し、我が方の攻撃も殆ど相手方に抑えられてチャンスなし、ただ一度前半十分頃 F W 石川がタッチに走りセンターリングがゴールポストすれすれに出て絶好球となったが左サイドが届かず逸機。かくして前半終了。

先生は身振り手振り黒板に図を書いたの熱演だった。「後半も一進一退相手方は藤井のポジションチェンジをしきりに行って当方を悩ませたが、バック陣の健闘でこれらをしのぎ延長かと思われた 27 分、半田の点等から一瞬をつかれゴールを割られがっくりきたまま 29 分追加点を許し試合終了となる」先生は、「大会を終了して思うことは、今年のチームは結成以来半年の経験不足だったが、来年度は、西原、小泉の 2 人が卒業するのみで、この補充をして必ずや全国大会に出場できると固く信じている。皆も一層蹴球部に応援を頼みます」一斉拍手。授業終了のベルが鳴った。

（中 43 回卒 田中幸衛）

当時全国大会を優勝など全盛を誇った埼玉師範を破るには2歳の年のハンディもあるので、少なくとも3年生以上が中心とならねばと考えられたのであろう。4年2・3年7・1年2の11人が新加入、3年生主体の新チームが構成された。再建蹴球部一年目は、北関東大会決勝でまたも埼玉師範に敗れたが、二年目には宿願の埼玉師範打倒を果たし、初の全国大会甲子園出場となった。

先生は兄の後を継いだ引き継いだ形で蹴球部長になったが、蹴球は素人であったと聞く。しかし、熱心な先生で練習には運動着姿で殆ど顔を出し、練習試合にはグラウンドの周りを選手の動きに合わせて走り回っていた。色黒で独特なカン高い声、当時では背

の高い部類に入る180cm近いスリムな長身などが印象に残る。

先生の3年計画最後の年（昭和16年）は、各試合の開催が中止になるなど戦争の影響で不本意な年となったが、前年、宿願の甲子園大会出場、今の国体にあたる神宮大会で第3位の成績を上げるなど、蹴球部の再興に尽くされた功績は大きいものであった。

昭和16年11月、陸軍省の転出。戦後はGHQの通訳で活躍された後、昭和26年10月から芝浦工業大学に奉職された。毎年、年賀状をいただき、浦中時代の蹴球仲間との再開を望まれていたが、お会いすることなく昭和49年2月、64歳で亡くなられたことは心残りである。

（中42回卒 高師 康）